

# 市民と編みあげる地域デジタルアーカイブ

Regional Archives Organized by Civil Cultural Activity

川嶋稔夫 木村健一  
Toshio Kawashima Kenichi Kimura

公立はこだて未来大学  
Future University Hakodate

In this report, we introduce collaborative projects which weave pieces of historical records into regional memory by citizen's activity. We indicate that group viewing is a very effective approach to organize pieces of records into archives.

## 1. はじめに

文字や映像などのさまざまなメディアを通じて、日常にかかわる多くの出来事が記録される時代になった。都市の大規模な記録としてかつては自治体史など入手できなかったが、現代では地域アーカイブはもちろん、たくさんの市民によるブログや Twitter, そして画像や映像の投稿サイトなどを通じて、市民自身による記録が日々生成されている。

地域アーカイブを作る活動は、市民自身が地域コミュニティの歴史を編纂する行為であることに加え、地域を理解し将来を展望するための市民による表現活動であるといつてよい。

しかしながら、大量記録される画像や映像に対して明示的に付与される情報はわずかであり、このアンバランスが将来画像や映像の価値を低下させる懸念はぬぐえない。そのため、記録の性質や記録間の関係を編み上げるしくみが必要になってくる。

そこで我々はこれまで 4 年間にわたり、市民自身がコミュニティの記録写真からアーカイブをつくりだす実験を行いながら、共同観賞によるアーカイブ構築の有効性に着目し、その支援方式について検討を行ってきた [川嶋 2008][永井 2009][川嶋 2009][川嶋 2010]。

そのなかで、少しずつ明らかになってきたことは、アーカイブの対象となる画像や映像についての情報提供者 (インフォーマント) が語り手として一方的に情報を提供するのではなく、聞き手が適宜質問をしながら語り手の話を聞く方式の方がより多くの情報を得られるという予想である。すなわち、立場や知識背景のことなる聞き手が明示的に存在することで、より多くの説明が得られると考えている。

本報告では、函館圏において市立図書館や博物館、大学などと、市民が連携して行っている、地域の記録をみあげる試みを紹介するとともに、それらを市民自身が編み上げることの意義について論ずる。そして、そのプロセスにおいて共同観賞という形式の有効性を確かめるために行った、実験および実践について報告を行う。

## 2. 函館における地域アーカイブの取り組み

著者らの住む函館市を中心とする北海道南部は、幕末に写真技術が導入されて以来、多くの写真記録が公的に収集されて

市立図書館に残されており、歴史資料として多くの研究に利用されている。

すでに、これらの古写真資料は古地図や絵葉書などの資料と併せて、デジタル画像に変換されデータベースに登録されており、web を通じて閲覧できるようになっている (函館中央図書館デジタル資料館 <http://www.lib-hkd.jp/digital/>)。

市民に写真機が普及してからの私的な写真記録も膨大であり、当初の私的撮影の意図を超え、都市の記録として事物や風俗などの価値ある記録を潜在的に含んでいるものが多いと考えられる。

市民が所有するこのような写真群を、それらに関係する人々の記憶を介して編み上げることは、個々の写真の価値を超えて市民による網羅的な写真アーカイブが実現できることを意味している。

記憶を介した写真資料の編み上げの基本アイデアは、共同観賞の採用である。共同観賞は、アーカイブの対象となる素材をグループで観賞し、そのなかで起きる発話などの行為によって、対象に関する情報を収集し、整理しようとするものである。グループの構成法やツールを工夫することでアーカイブに潜在する情報を引き出すことが狙いである。

これまで行った実験は次の 3 種である。

1. 共同観賞を支援する情報システムの研究 [川嶋 2008]
2. 共同観賞による音声アノテーション取得とその活用 [永井 2009]
3. 共同観賞による写真アーカイブ編纂支援 [川嶋 2009][川嶋 2010]

情報の受け手であるはずの観賞者が、観賞を通じて発話し結果的に編纂作業に参加することが手法の特徴である。また、グループによる共同観賞では、観賞対象に対する視点の差によって、話し手と聞き手が自発的に発生する点も、興味深い。また、一連の研究を通じて、話し手がもつ情報で埋もれがちなものを聞き手が引き出すことも見受けられた。

そこで、以下に紹介する 2 つの研究では、コミュニティの写真記録をもとに共同でストーリーテリングを行う実践、および博物館における展示記録を写真および共同観賞の記録として実現する試みについて紹介する。

### 3. コミュニティ写真の対話的編み上げ

コミュニティにはその構成員が個別に保存している数多くの写真があるが、多くは未整理で編集や鑑賞が行われていることは稀である。先報 [川嶋 2010] では、これらの写真に着目し、写真をデジタル化する過程で構成員自らが編集行為を行いながら、鑑賞するための枠組みである上映会を開催し、コミュニティ独自の写真アーカイブを作る取り組みを実践した。対象コミュニティは函館市内で40年間活動している華道グループである。

#### 3.1 実験 1: 上映会による共同鑑賞

上映会は、液晶プロジェクタで40年間分500枚ほどの写真をスライドショーで映し出すもので至極単純な設えである(図1)。参加者は40年間の活動を主導してきた80代の女性華道家2名A、幼少時から周道的に活動に参加している40代の女性華道家B、そして華道初学者の50代男性Cである。テーブルを囲み、並んで上映画面を眺めるという位置関係を作った。

当初の目論見は写真による過去の記憶の想起という単純なものだったが、立場や活動への関与度の違いが記憶の編集に大きく影響を及ぼすことが会話記録の分析で明らかになった。

Aは文字情報で記録されたい写真キャプションを超える膨大な周辺エピソードを語る。Bは正統的周辺参加の立場から、示されたエピソードの意味やあり方について問いかける。いわば共同鑑賞におけるファシリテータの役割を担った。Cは初学者らしいコミュニティが有する文脈とは逸脱した一種素朴な質問や感想を述べることで、会話の輪をずらし、広げる。



図 1: 上映会による共同鑑賞

#### 3.2 実験 2: 年表型インタフェースによる共同鑑賞

その上で、既編集された写真の鑑賞方法として年表型に空間に配列して展示し、そのスペースの中で移動しながら共同鑑賞することで記憶の再編集を促すことを試みた(図2)。

ABCの役割分担が共同鑑賞に際して有効に作用するという仮説に基づいて、参与観察を行った。「社中」と呼ばれる稽古グループで来場した。Aに相当する。Bは上記と同様の人物。Cは展覧会運営に携わっている初学者である。

設えが縦20M×横20Mのギャラリースペースであったが、上映会同様の会話の型を観察できた。タイムラインが一望できることから、Aが積極的に写真に近づき眺め、興味の赴くままに移動し、指差しやうなずき行動を頻繁に行いながら発話する。B、Cはその発話要旨を付箋にメモをして貼付する。付箋を読むことでAは更に新たなエピソードを途切れなく語る、という状況を生じた。

表現活動を主とするこのコミュニティでは、表現者同士の切磋琢磨を促す展覧会や集まりが開かれている。さまざまなエピソードがあることは自明だが、共同鑑賞を行う事で、写真をみながらの対話がリフレクションを促進し、写真に新しい意味や解釈が付与し、さらにはコミュニティの記憶の再編集を促していることを観察できた。経験したことのない「実に楽しいもの」だった、という異口同音の感想だった。展示メディアの一望性は、観賞者が図像を自在にレイアウトし(身体を移動し視線を動かす)新たな解釈を生み出す事に作用するという可能性を示唆している。



図 2: 年表型インタフェースによる共同鑑賞

#### 3.3 実験 3: 巻物型インタフェースによる共同鑑賞

そこで、同じ写真データを年表型巻物3巻(図3)にまとめ、ABCの役割を担う観賞者を実験者が設定して観賞会を2度実施した。ABはこれまでの実験と同一人物だが、Cは立場が同様だが別の人物とした。展示で掲出した写真を展示会場のレイアウトはそのままに、一般的な巻物サイズに縮小し、一望性を重視して手にとって鑑賞できるようにし、テーブルを囲む形での共同鑑賞の場を設えた。展示空間で起きた記憶の再編集を示す行動や発話が頻繁に起きる事が確認できた(図4)。

展示空間では、会話の途切れ、話題転換に際しては、体を移動させ別の展示物に向かうという行為や、展示物から距離を置いて眺めるというような行為で新しい話題に移る姿が見られた。この話題転換のポイントが会話の盛り上がり重要なのだが、年表型巻物ではより頻繁に「巻き取る、再度開く」、別の「巻物を手に取る」、「大きく巻物を広げて指差し」し「並べて広げた巻物を視線や指を行き来させながら語る」という行為で示された。実験1, 2, 3を通じてABCの役割が観察され(時には大胆に役割が入れ替わる局面もあるが)、「会話の泡立ち感」とでも言えそうなクロストークを伴いながら記憶の深化、再解釈という高度な共同鑑賞が起きていた。

#### 3.4 対話的編み上げ

古来、日本独自の歌形式である「連歌」では、複数の歌人(3人で構成されることが過半を占める)が順番に歌を相互に詠み合う形式を良しとしてきた(会話の泡立ちの形式化)。いわばこれは良い作品を生み出すための経験則だが「対話的編み上げ」のベースになる枠組みがある。この経験則で歌人は各自の歌という作品を保持しつつ、各々が適切と感じる方向に自由に流れを変える事ができた。しかも最終段階では、相互に協力しながら連歌という厳格な形式持つ「対話の成果をまとめた」作品を編集できる。



図 3: 巻物として構築したアルバム



図 4: 巻物インタフェースを介した共同観賞

ここでの3人の役割は本項で示したABCの役割をそのまま投影できそうである。

#### 4. 博物館展示の共同観賞を通した展示記録の編み上げ

地域の博物館は、歴史や自然、民俗に関するモノを集積して収蔵し、展示する施設である。博物館では定期的に学芸員が一定の方針のもとで選びだした収蔵品を展示している。規模の大きな展示であれば、写真や文章を図録として残すことができるが、小規模な展示では地域の自然や文化を理解する上で重要な情報を含む、学芸員が意図した展示の構成方針が残されない。

そこで、われわれはこれまで述べてきた、共同観賞にもとづく手法によって、展示の構成方針に関する情報を収集する方法について検討を行った。

##### 4.1 対象と記録手法

市立函館博物館が収蔵する「三平皿（さんぺいざら）」の展示を対象に、学芸員が博物館利用者に対して説明を行う様子を記録した。

三平皿とは、北海道で三平汁とよばれる郷土料理を盛り付けるためだけに利用される深皿のことで、さまざまな絵柄の皿が同館に収蔵されている。今回の展示では同館の霜村紀子学芸員が、三平汁の由来と三平皿が利用されるに至った経緯、いろいろな絵柄の皿がどのような意図で製造されるにいたったかを調査推定し、展示を構成している。

われわれはこの展示対象が市民にとってなじみ深く、その由来を深く考える機会が少ないものであることに注目し、学芸員



図 5: 函館博物館における三平皿展示

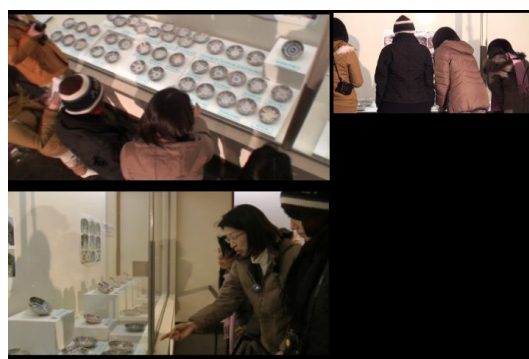


図 6: 三平皿共同観賞の撮影の様子。指差しが学芸員。

と博物館利用者が共同観賞しながら展示ツアーを行い、どのような発話が行われるかを観察することにした。

##### 4.2 共同観賞による展示物記録の編み上げ

展示自体はすでにある意図に沿って、収蔵品を整理し、取捨選択したものである。したがって、展示の流れ自体が文脈をもっている。しかしながら、展示品に関する説明の文章は通常控えめにしているため、展示の意図が伝わりにくいことがある。そこで、われわれが学芸員が来館者に説明の様子を記録することを通じて、展示の意図や展示物に関する情報の収集を試みた。

##### 撮影方法

霜村紀子学芸員および利用者3名（うち2名が主として会話に参加）がグループになって展示を順路に沿って共同観賞する。共同観賞の様子は、2台の小型ハイビジョンカメラ（1台は手持ち、1台は三脚に装着）および1台の小型カメラ（SONY まめカム HD、ボールの先端に装着し上部から俯瞰画像を撮影）を利用して記録した。

これにより、展示室内の場所、観賞対象とする皿、指差し行動の記録が得られる。音声は学芸員に装着したワイヤレスマイクを介して記録した。

##### 観賞記録

展示室中央のガラスケースに展示された三平皿30枚と、壁面のガラス展示ケース内に展示された151枚についての解説と共同観賞を約90分かけて記録撮影した。





図 7: 食卓における三平汁の位置付けの違いに関する議論

#### 発話の特徴

詳細な分析はこれからであるが、一部の発話記録を示す。

##### 1. 図 6 の指差し部分の会話

学芸員: 全部並べていくうちに、これとこれは似ているってひらすら並べていったんですけども、で、ここは梅に鶯コーナーにしたんですよ、私の中で、で、絵柄としては梅と鶯だなと。でまあ小鳥なんですけれど、梅に鶯だろうと、これは絵としてそうだと、で、これは松竹梅が基本となって、書かれているのが梅と鶯なんだけど松と竹も書かれている。だから、松竹梅に鶯図というめでたい攻撃ですね。

##### 2. 図 7 の食卓での三平汁に関する会話

見学者 1: でもなんか夕ご飯で三平でくるとがっかりメニューだよな。  
 学芸員: えーっ、本当ですか。いや全然、がっかりじゃないですよ。  
 見学者 1: えーっ、三平って。はははは。  
 見学者 2: わくわくしない。はははは。  
 学芸員: えーっ、私うれしかったのに。本当ですか。いったい何ですか。  
 見学者 2: 地味だから、色が。  
 学芸員: でも、(三平皿の成立の歴史パネルを指差し) あの成り立ち的にはありあわせの魚と非常食みたいな感じですよな。  
 見学者 2: 魚も塩漬けにしたやつだから。  
 見学者 1: そんなにいい魚じゃない。  
 学芸員: ちょっと(函館に住む)海辺の人って贅沢じゃないですか。(釧路出身の)私たち、魚っていったら贅沢な感じで。もうシャケしかいませんもん。

#### 4.3 考察

1 の会話では、学芸員は展示設計のプロセスを、展示物を共同観賞しながら展示設計のプロセスを思い出しながら、適応的に解説していることがわかる。共同観賞ではこのような、収蔵物を体系化し展示構成を設計するための分析のプロセスを聞き出すことができている。これは、共同観賞を通じて見学者の興味の所在を推測しながら解説しているためと思われる。

2 の会話では、学芸員のもつ背景知識とは異なる理解が見学者からもたらされ、学芸員が一瞬たじろいで後ろに下がる姿が観察された。この 3 人は、知り合いであったために異なる見解を積極的に扱うことができていることがわかる。

おそらく聞き手の存在が、話し手のもつ情報の顕在化に役立っていると推測してよいだろう。ただし、聞き手の数と話題へのかかわり方も話し手に影響を与えるだろう。とくに、主たる話し手と、聞き手 2 人の様式はさまざまな場面でみられることから、聞き手の側でも対話を構成する上の役割分担が生じているものと考えられる。前章の実験に対応させると学芸員が A に、見学者 1 が B に、見学者 2 が C と類似の役割を担うケースが見られる。

今後は博物館展示の場における対話記録の実験を重ねて、どのような役割分担が生じたときに、より展示にかかわる情報を顕在化できるかをあきらかにしてゆきたいと考えている。

## 5. まとめ

市民による共同観賞を通じて街の記録(コミュニティアークイブや博物館展示記録)を編み上げるための函館での実験について報告した。アーカイブは文書や画像の記録の正統性にばかり目が向けられるが、コミュニティアークイブに関してはストーリーテリングを通じて得られる記録から派生的に生じる情報も重要である。

その場合、地域コミュニティにかかわる情報は、市民自身が情報提供の担い手であるが、潜在化しがちな情報を引き出すためには、適切なインタフェースと場の設えが極めて重要である。

今後、いくつかの場を事例として実践を試み、写真や展示物の共同観賞を支援するインタフェース(巻物インタフェースや上映方式など)と、共同観賞への参加様式(2章における ABC などの役割分担)について研究を進めたいと考えている。

謝辞

博物館における共同観賞記録の撮影にご協力くださった、函館博物館霜村紀子学芸員、本学片桐恭弘教授、角康之教授に感謝します。

## 参考文献

- [川嶋 2008] 川嶋稔夫, 木村健一, 永井寿憲, 越谷千紘, 鑑賞によって編み上げるデジタルアーカイブ, 第 22 回人工知能学会全国大会, 2008
- [永井 2009] 永井寿憲, 川嶋稔夫, 写真アーカイブにおける共同観賞ログとその活用, 電子情報通信学会オフィス情報システム研究会, 2009
- [川嶋 2009] 川嶋稔夫, 木村健一, 街の記録を編みあげるデジタルアーカイブ, 第 23 回人工知能学会全国大会, 2009
- [川嶋 2010] 川嶋稔夫, 木村健一, 共同観賞によるコミュニティアークイブ構築のためのプラットフォーム, 第 24 回人工知能学会全国大会, 2010
- [宮武 2011] 宮武志保, 木村健一「共同体のストーリーテリングを支援する年表型巻物の提案」展示, 函館市地域交流まちづくりセンター, 2011